

いじめに関する実態及び指導についての考察

—「自分の発揮度」や「教師からの尊重」を通して—

内 田 利 広 ・ 大 見 忠 彦

(京都教育大学)

(宮津町立宮津中学校)

A discussion of the actual situation and guidance about the bullying at school
— through “the degree of displaying the self” and “the respect from the teachers” —

Toshihiro UCHIDA · Tadahiko OHOMI

2000年11月30日受理

抄録： 本論では、中学生に対する意識調査により、いじめの実態を明らかにし、最近のいじめの特徴やいじめに対する意識の持ち方について検討した。さらに、生徒を「いじめられる群」「いじめる群」「傍観者群」の3群に分けて、それぞれの学校生活での自分の発揮度や教師への相談、教師からの尊重の有無において差があるかどうかについて検討した。

その結果、性差によっていじめの方法やいじめられた気持ちにおいてかなり異なることが明らかになった。また3群での比較では、いじめられている群が学校での自己の発揮度が高く、逆にいじている群は発揮度が低く、学校生活での不満や自分が認められないことへの苛立ちが、いじめへとつながりやすいことが示唆された。

キーワード：いじめ、教師への相談、自分の発揮度、傍観者

I はじめに

今、教育界は、非常に難しく厳しい、いわば混乱期を迎えているのではないかと思います。まさに教育現場では、日々、様々な問題が発生していますが、中でも「いじめ」や「不登校」といった問題は大きな社会問題にもなっています。昔と比べ、何がどう変わってきたのか、これからは何が必要なのか、学校や家庭はもちろん、社会全体で考えていく必要に迫られている。これまでの研究で、社会学的な視点（森田⁶⁾、竹川²⁾）やカウンセリング（井上¹⁾）、教育心理学（深谷⁵⁾）の視点から検討されてきたが、本論では、教育現場で、教師の視点からみて役に立つ生徒の意識や指導法について検討していきたい。

いじめ事象については減少傾向にある、という教育現場からの報告が増えてきている。実際、行為そのものが減少しているのは、現場に立つ一教師として納得はできる。しかし、それは数字上のことではないのか。もともと「いじめ」というものは陰湿で、はっきり表にできることなく、一人の人間の人権を傷つけたり、また脅かしたりするものであって、社会全体がいじめ問題を大きく取り上げる今では、人の目に見えない地中奥深くに隠れているのではないかと。また、数字的には減少しても、事象の内容が深刻化してきているため安心はできず、早期に発見して対策を講じなければならない。

また、現代社会は子どもたちが生きていくのに非常に難しい社会だと言われています。様々な誘惑が子どもたちを襲い、子どもたちは大人たちが作った現代社会の犠牲者となって外見のみが発達し、そして心が成長していないといった人間になっていくのである。そんな子どもたちは、誰もが親や教師を含めた大人たちに常にサインを出しているのではないかと。「いじめ」や「不登校」といった事象は、全てサインなのではないかと考えてみるのが、その解決につながるように思われる。

生徒と触れ合うことで生徒の内面を理解し、理解した上で生徒に援助の手をさしのべる。そのために、教師はどういった力を身につければいいのか、何が必要なのか。これらのことは教師にとって永久の課題であり、またそれは日々の実践で培われるものであると思われる。教育の「混乱期」という今の時期は、言い換えれば「改革期」でもある。学校教育だけではどうしようもない部分もあるが、地域や家庭と連携をし、今、学校でできるこ

と、やらなければならないことを模索しながら、教師としての関わりをもう一度再吟味してみたいと考えている。そして、今回行った生徒の意識調査が、わずかでも今後の実践に向けてのヒントになればと願っている。

II 問題と目的

1 目的

本研究は、最近の中学生が、いじめ問題に対してどのような意識を持っているのか、実態はどうか、また、日々どのような意識で学校生活を送っているのかを、「いじめ問題に関する意識調査」を通して調査、分析し、その実態と傾向から今後の教育的課題を考察するのが目的である。

(1) いじめの実態

いじめ問題は、学校生活だけに起因するというものではなく、家庭・学校・地域それぞれの教育活動において対処していかなければならない問題であると考えますが、それでも学校内で発生することが多く、また教師の知らない所で起こっているという実態が多く見られる。

一時期に比べ、いじめ事象の件数は減少傾向にあり、これは文部省や各都道府県並びに各市町村教育委員会のもとより、学校教育現場における一人ひとりの教師の地道な取組がその成果の一端を担っていることはまちがいないであろう。しかし、減少傾向にあるからといって、もちろん満足は出来ない。それは、いじめという事象が完璧になくなることはないからである。そして、いじめ問題がこれだけ社会問題化してくると、いじめ事象はいよいよ見えない方向へと突き進んでいってしまう。そうなれば子どもたちの心は厚い壁で閉ざされてしまい、教師と生徒の関係はもとより友達間での信頼関係さえ崩れていってしまう。今、教育現場では、いじめ問題に限らず、こういった人間関係に陥ってしまうことが非常に多いのである。

(2) いじめの定義

いじめの定義というのは必ずしも一定していないが、文部省の調査によると、「学校の内外を問わず、自分よりも弱いものに対して一方的に、身体的・心理的な苦痛を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」としている。しかし、教育現場においては、教師も生徒もこれはいじめだとか、ここまでならいじめとは違うなどといったはっきりした認識は持っていないのが現状である。いや、持たないというか定義として決めつけない方がいいのではないか。

例えば、継続的ではなく一過性のものであっても、いじめと捉えられる事象はいくらでもある。つまり、定義を持っていることで指導が後手にまわることも考えられるからである。大切なのは、指導する側の教師の意識であり、当事者たちに対するタイミングを逃さない指導なのではないか。

(3) 意識調査の仮説

最近の生徒は、自他を尊重したり友達との人間関係を築いたりすることが、とても不得手であると思われる。言い換えれば、様々な集団の中で自己存在感を実感したり、心から信頼できる友達を作るとは苦手であろうと考えられる。しかし、こういった力をつけることが、まさにいじめ防止につながっていくのではないか。つまり、個性を生かしながら自己を確立していくとともに、相手を思いやる心や感動する心を育むことで、一人ひとりが大切にされる集団が作られ、そのような集団の中ではいじめ事象はほとんど起こらないのではないかと考えるのである。

以上のような考えに基づき、いじめに関する調査により、いじめる側の群、いじめられる側の群、周りで見ていた傍観者群の三群を作り、それぞれがどのような学校生活や友達関係を作ってきたかを検討することで、いじめの実態に迫り、さらにいじめの予防につながるような示唆を得られればと思っている。

2 調査の概要

(1) 調査目的

① 中学生が、いじめ問題に対してどのような意識を持っているのか、実態はどうか、また、日々どのような意識で学校生活を送っているのかを調査することにより、その実態と傾向から今後の教育的課題を考察する。

(2) 調査時期 平成11年10月上旬～中旬

(3) 調査対象

① 調査実施数は

中1 155人 中2 146人 中3 157人 計458人

そのうち、有効回答者は

中1 115人, 中2 93人, 中3 112人 計320人

(男女内訳 男子152人, 女子168人)

これは京都府下の5つの公立中学校より、各学年1クラスを無作為に抽出し実施した。

(4) 調査方法 質問紙法(無記名で回答)、依頼した中学校に人数分の調査用紙を配布し、ショートホームルームの時間などを利用して行ってもらった(資料参照)。

Ⅲ 結果 : 生徒の実態

意識調査の前半において、「小学校時代から現在までのことで」という条件でいじめたことがあるか、いじめられたことがあるか、見てみぬふりをしたことがあるかということを中心に質問した。それぞれの結果をもとに、各項目ごとに考察をしていきたい。後半では、いじめとは関係なく学校生活のことで尋ねたが、前半に行ったいじめについての回答から「いじめる側」・「いじめられる側」・「傍観者」の3グループに分類し、それぞれのグループ毎の意識の違いを検討する。

1 いじめに関する実態

(1) 設問1より

「あなたは、他人をいじめたことがありますか」という問いに対し、「全くない」と答えた者は、男子が35%、女子が36%となっており、この結果から一度でも他人をいじめたことのある者は、男女とも6割強ということになる(図1)。ただし、「一度だけ」と答えている者をどう捉えるかということは非常に難しく、いじめる側の常連ということで考えると、この「一度だけ」という者を除いた男子4割、女子3割強の者がそれにあたると考えられる。また、その常連ということだけで見ると、「いじめたことがある」という数は、女子より男子の方が多いためである。

同じ問いを学年別で見てみる(図2)。一度でも他人をいじめたことがあると答えた者は、1年生70%・2年生64%・3年生60%であり、1年生が一番多い。しかし、上述した常連ということで考えて見ると、1年生37%・2年生32%・3年生39%という結果になっており、3年生が一番多い。このことは、1・2年生ではまだ、一度しかいじめ行為をしていないが、学年が上がるにつれ、その中から常連となっていく者があると考えられる。また、学年が低いほどいじめの経験者が多いということはいじめの低年齢化が著しく、多くの者が1度や2度はいじめに加わったことがあるが、学年が上がるにつれて、それを繰り返していく者と、全くしなくなる者との2極化が起こると考えられる。

次に、いじめ行為をしたことがあると答えた(回答「ア」「イ」「ウ」)者に対し、(1)～(5)の質問に答えてもらった。対象は、男子99人・女子107人である。

問(1)で、「あなたがいじめをした一番の理由は?」と尋ねた(図3)。男女ともほとんど同じ様な理由で、いじめをしていることがわかる。一番多い理由である「その人がきらい」というのは、その人自身の存在を否定しており、相手を思いやる心がなく共感的理解も示さない、また異質なものは排除するといった考えがあることを浮き彫りにしている。

「みんながしていたから」という理由は、男女とも2割近くあるが、これは主体性のなさ、つまり、周りの状況に簡単に左右されて、自己決定をしていく力が不足していることを示しているし、さらにみんなとは異なることをして、自分もされたら困るからといった気持ちも含まれていると考えられる。

問(2)では、「何人でいじめたか?」と尋ねた(図4)。これに関しては、男女で明らかに違いが表れている。男子が自分一人で行っているのに対し、女子はグループで、それも、「2～3人」といった少人数でいじめを行っている。この「2～3人」というのは、女子が日頃いつも一緒にいる仲の良い友達であろうし、グループ同士のいがみあいということも考えられる。まさに、女子特有のグループ化がこのような結果をもたら

図1 他人をいじめたことがあるか(男女別)

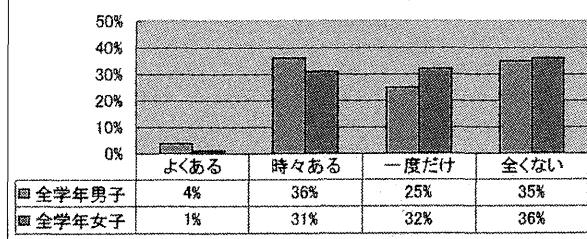


図2 他人をいじめたことがあるか(学年別)

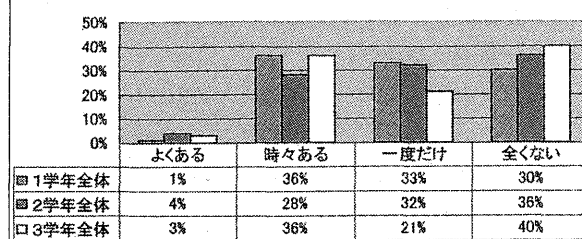


図3 いじめをした一番の理由は

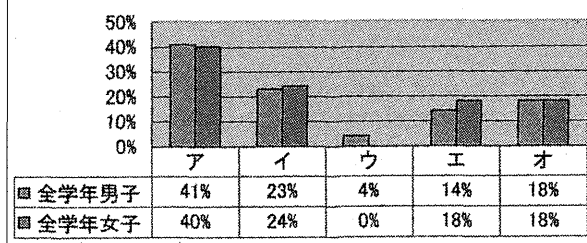


図4 何人でいじめたか

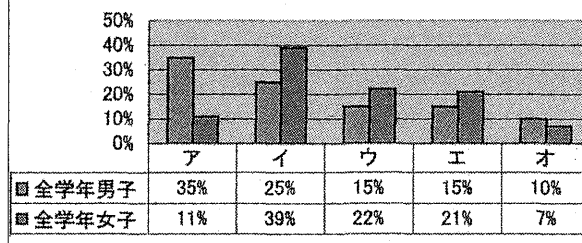


図5 どんな方法でいじめたか(複数回答)

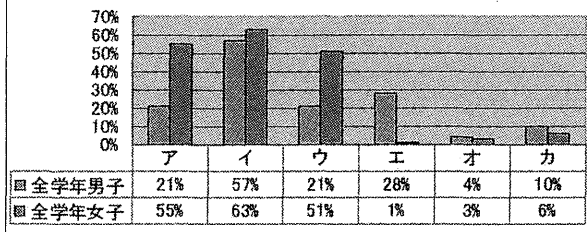
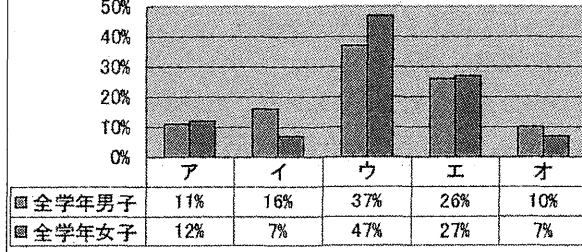


図6 いじめた後は、どんな気持ちだったか



していると言える。

問(3)では、「どんな方法でいじめたか?」について、複数回答で尋ねた(図5)。男女とも「悪口や陰口を言われた」が最も多いが、次に多いのを見てみると、男女で特徴的な違いがあり、男子では「暴力をふるった」、女子では「無視をした」・「仲間はずれにした」となっている。

問(2)で述べた特徴のとおり、男子は個人で、女子はグループでいじめを行う、ということが顕著に表れている。また、女子では、表面に表れない無視・陰口・仲間はずれといった相手に心理的苦痛を与える方法でいじめを行っていることもよくわかる。

問(4)で、いじめた後の気持ちを尋ねたが、男子で37%、女子で47%の者が、後悔もしくは反省をしており、被害者に対して申し訳ないといった気持ちを表している(図6)。これは、後でも述べるが、いじめをした者の中で相当数(男子3割強、女子4割強)の者が、いじめられた経験もあると答えていることから、被害者の気持ちも理解できているということが考えられる。しかしその反面、男子で27%、女子で19%の者が、「ざまあみろと思った」・「すっきりした」と答えており、全く反省をしていないことがうかがえる。さらに「何とも思わなかった」と答えている者が、男女ともに約3割いる。

これは、今の子どもたちに不足していると言われる他者と共生していく力、つまり思いやりだとか、倫理観といった力が備わっていないということを、示しているのではないか。ある意味では、「すっきりした」と答えている者よりも、「何とも思わなかった」と答えた者の方が、豊かな心を育むといった観点からみて、無感情でそのような行為が行われるという、非常に困難な課題をもっている生徒とも言えるであろう。

問(5)で、「いじめを止められた人に尋ねます」と前置きして、「なぜ、いじめを止められたか」と、自由記述で尋ねた(図7)。

いじめをしたことがある者が、なぜそれ以後いじめをしなくなったのかを明らかにすることは、加害者の心理

図7 なぜ、いじめを止められたか

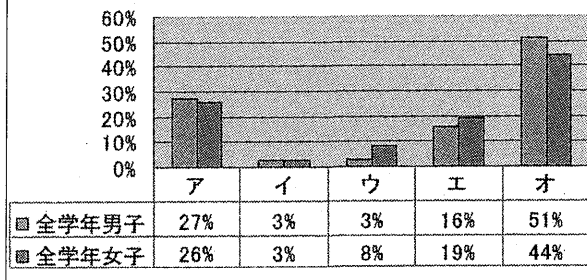


図8 あなたは、いじめられたことがあるか(男女別)

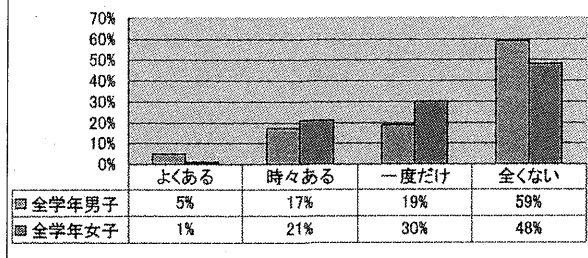


図9 あなたは、いじめられたことがあるか(学年別)

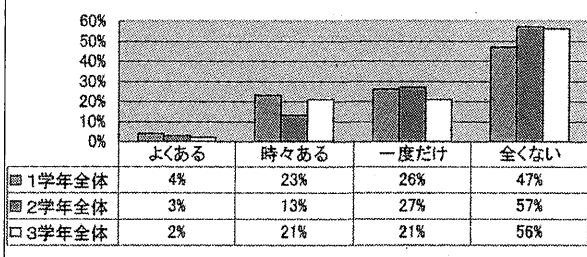
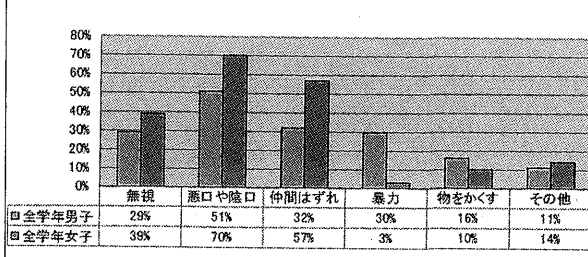


図10 どんな方法でいじめられたか(複数回答)



を知り、今後の指導につなげる意味で非常に興味深いものである。

今回の調査では、男女とも約4分の1の者が、自分で悪いことだと思い、いじめをしなくなっている。4人に1人がそういう気持ちになっているということは、ある程度は良心・倫理観を持っていると思われるが、問題は、その他の生徒の考えである。「何となく」・「べつに」・「面倒くさい」といった回答をした生徒については、悪いことだという認識が全くなかからず、気分によっては、また、いつ、いじめ行為を行うかわからないといった状況なのではないかと思われる。さらに、男女とも、「オ」の回答のほとんどが白紙であった。この意味は、自分の気持ちを言葉で表現できないのか、あるいは表現したくないのか定かではないが、自分自身を理解し、受け入れながら自尊感情を育てていく、といった自己確立の重要性を考えた場合、そういった力のなさを非常に感じる。自分の行動に自覚と責任を持たない現代の生徒の特徴を示していると思われる。

(2) 次に「いじめられたことがあるか」ということについて、設問2で尋ねた。

まず男女別で見ると(図8)、男女とも半数以上の者が「全くない」と答えている。設問1で述べたように、「一度だけ」と答えた者を除いた数(ア・イと答えた者)をいじめられる側の常連とすると、男女とも22%となっており、いじめる側の常連(男子40%・女子32%)と比較すると非常に少ない。これは、いじめる側の生徒が広範囲に及んでいるのに対し、いじめられる側の生徒は一部の特定の生徒に集中していることを表していると考えられる。また、「全くない」と答えた生徒が、男子で約6割、女子で約5割いることから特定の子どもへの集中化ということが考えられる。

次に、学年別で見ると(図9)。一度でもいじめられたことがあると答えた生徒は、1年生だけ50%を越えており、またいじめられる側の常連ということで考えてみても、1年生が一番多い。設問1と同じく、ここでもいじめの低年齢化ということがうかがえ、特に1年の頃は、多くの者が1、2度はいじめられた経験を持っていると思われる。そして、その中で特にターゲットになりやすい生徒が繰り返され、いじめられる側も2年、3年となるとそれが続く者と、一時的に終わる者との2極化がおこっているのではないかと推察される。

次に、「いじめられたことがある」と答えた(回答ア・イ・ウ)者に、(1)～(2)の質問を行った。対象者は、男子63人・女子88人である。

問(1)では、「その時、どんな方法でいじめられたか?」について、複数回答で尋ねた(図10)。設問1の問(3)で出た結果とほとんど同じで、男女とも「悪口や陰口を言われた」が最も多く、他の特徴的なこととして、男子の「暴力をふるわれた」に対し、女子は「無視」や「仲間はずれ」といった表面に表れにくい、陰湿で、集団でいじめるといった傾向があげられる。

また、この問(1)に対しては、その他の回答に含まれているが、白紙回答というのが目立った。図10の「カ そ

図11 いじめられた時、どんな気持ちだったか

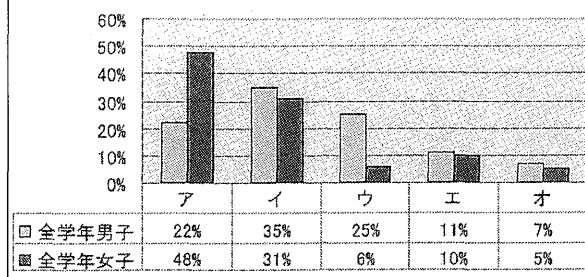


図12 見てみぬふりをしたことがあるか(男女別)

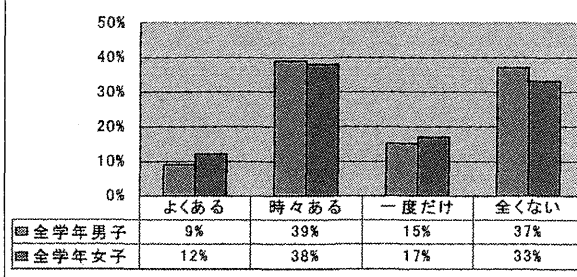


図13 見てみぬふりをしたことがあるか(学年別)

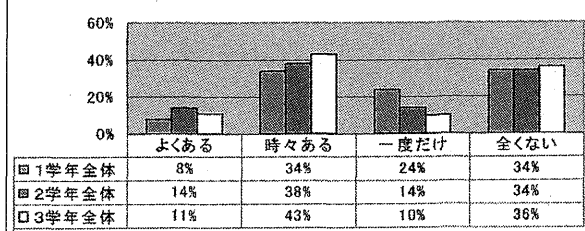
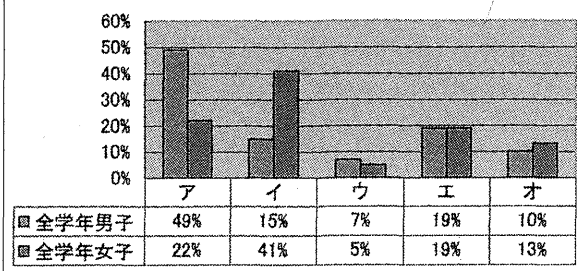


図14 見てみぬふりをしたのはなぜか



の他」の中の男子4人・女子10人が白紙であり、さらに、そのほとんどが「ア よくある」・「イ 時々ある」と回答している者であった。この白紙回答の意味については様々な解釈があるだろうが、いじめを受けた者の「思い出したくない」といった気持ちがたぶんに含まれていると考えられる。また、被害者が受けた心理的苦痛というものが大きく、その内容を言葉で表現すること自体が今現在でもまだ難しいのではないかと考えられる。

問(2)では、「いじめられた時、どんな気持ちだったか？」と尋ねた(図11)。女子の半数近くが、「悲しくて泣きたい気分」と答えており、感情を自分の中にしまい込み、相手が憎らしいとか何とかしてやりたいなどといった攻撃的な思いよりも、いじめ行為そのものに精神的な苦痛を感じているということがうかがえる。

一方男子では、「腹が立って憎らしい」・「仕返しをしたい」など、いじめた相手に対しての怒りの感情を表しており、心の中では、相手に対して攻撃性というものを持っているということがうかがえる。

(3) 設問3では、「見てみぬふりをしたことがあるか？」と尋ねた(図12・13)。まず、男女別の結果(図12)についてだが、男女で比較した場合、ほとんど違いはなかった。男女ともに6割以上のものが「ある」と答えているが、それはつまり、いじめ行為が行われているその現場に居合わせながら、止めたり、また先生等呼びに行くこともせずに、黙って知らぬ顔をしていたということであり、考え方によっては道徳性あるいは人間性の欠如といったことにつながる重要な問題ではないか。

この傍観者の問題については、様々な意見があり、議論もなされている。もちろん、いじめる側への指導も重要ではあるが、誰でもなりうる可能性があるこの傍観者といった立場への指導について、再認識していかなければならない。いじめを未然に防いで行くには、このような傍観者がいかにいじめの抑止になるようにクラスの雰囲気を作るようなクラス運営につながるものと思われる。

次に、学年別での結果だが、男女別で見た場合と同じような結果(図13)であり、3学年ともに、「見てみぬふりをしたことがある」と答えた者は、6割以上となっている。さらに、「よくある」「時々ある」と答えた者が、男女別・学年別ともに、ほとんど5割を占めているのが気になる。

次に、「見てみぬふりをしたことがある」と答えた者(回答ア・イ・ウ)に、「なぜ、見てみぬふりをしたのか？」と尋ねた(図14)。男子では、「遊び半分だと思った」と答えた者がほぼ半数を占めた。これは、明らかにいじめ行為だとわかっていながら、遊び半分だと認識することで、自分の立場を正当化しようとする、といった考えが多く含まれていると考えられる。中井⁴⁾が指摘するように、深刻ないじめではいわゆる「良心外し」が行われるが、必ずしもそれが成功しているわけではない、つまり、いじめ行為であると認識したならば、何とかしなければならぬ。だが、何もできない。その結果、心理的な葛藤が働いて自分自身を責めてしまうことになり、それ

図15 いじめだと思うものはどれか(複数回答)

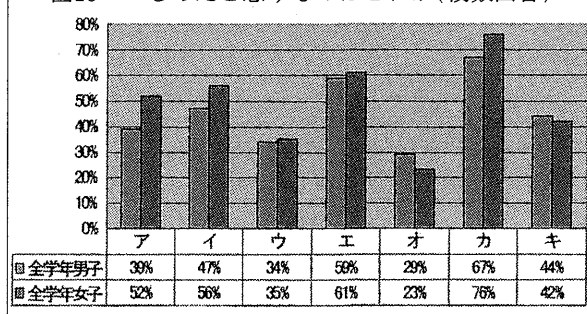
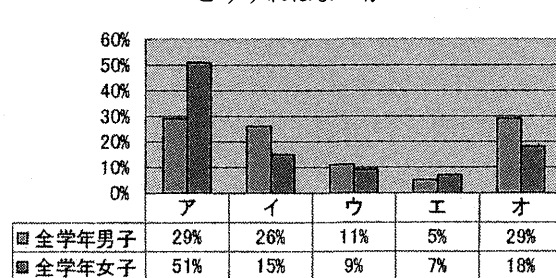


図16 いじめを防止したり、なくしていくにはどうすればよいか



を回避するために、これは「いじめではなく遊んでいるだけなんだ」と自分に言い聞かせているのではと思われる。

女子では、「あとで自分もされるから」と答えた者が圧倒的に多い。これは、自分が被害者になった場合の苦痛を考え、その場の被害者には悪いと思いながらも、見てみぬふりをすることでその場から回避したいという心理が働いていると考える。ただ、男女ともに、この「見てみぬふり」という行為には、相当な心理的葛藤が起こっているであろうと推測される。

(4) 設問4より、設問1～3において、いじめる側、いじめられる側、傍観者といったいじめ事象の実態を調査したが、それではこの生徒たちが、いじめというものをどういうふうに捉えているのか、生徒たちの「いじめの定義」を知るためにこの設問を設けた。

下記の中から、「いじめと思うものはどれか」と複数回答で尋ねた(図15)。

男女ともに一番多いのは、「カ」の下級生に強引におごらせたというもので、7割前後を占めている。これは、男女とも意識の中に、「自分よりも弱い者に対して」ということが含まれており、特に、そういった経験のある者または現場を見た者は、被害者の苦痛がよく理解できるため、「いじめ行為」と判断したと思われる。次に、「エ」が男女とも二番目である。ここでは、「数人で」や「無理やり」といった表現に、いじめというものを連想したと考えられる。他に、5割を越えているものとして、女子の「ア」・「イ」の回答がある。男子の回答がどちらも5割に達してなく、男女の意識にやや差があるが、これは、設問2の「どんな方法でいじめられたか」にも関係してくるが、女子の意識が「無視」「仲間はずれ」といったものに非常に敏感になっており、自分自身がこのようなことを経験しているといった者も少なくないからであろう。ただ、設問2では、「悪口や陰口などの方法でいじめられた」が一番多かったが、上記の結果を見ると、陰口という表現がしてある「オ」は、男女とも最も少ない。これについては、「他人の悪口を平気で言う人に対しての陰口」ということで、いじめ行為とは受け取らなかったのではないかと考えられる。

ここでは、いじめ事象に比較的多い場面を想定して設問項目を設けたが、生徒は自分自身の経験等と照らし合わせ回答をしている。これは仕方のないことで、逆に、文部省等の「いじめの定義」について学習していなくても、どういった行為がいじめにあたるかということをもつて学習しているということである。ある生徒が、「その現場に立ってその状況を見てみないと、いじめかどうかはわからない」と書いていたが、まさにその通りである。大切なことは、一人ひとりが「いじめ」ということについて日頃からどれだけ敏感になれるか、しっかり状況を把握して正しい判断ができるかといったことなのである。

(5) 設問5より、いじめに関する設問の最後として、「いじめを防止したり、無くしていくにはどうすればよいか」ということを、自由記述により尋ねた。

自由記述としたため様々な意見があったが、図16(ア. 一人ひとりの意識、イ. 社会全体の問題、ウ. いじめ側の問題、エ. 無くすことは無理、オ. 白紙)のような枠を作りあてはめた。

調査の時点では、「オ」の白紙及びわからない等の回答が半数を占めると予想したが、男女とも3割以内であった。白紙及びわからない以外の回答では、「先生がいじめに早く気づく」・「いじている人の気持ちが全くわからないから、どうしていけばいいかもわからない」というのもあった。全体的に見て、「オ」の回答が少なかったということは、自分なりに、いじめ問題について考えていることがうかがえる。

女子では、「一人ひとりの意識が重要」と答えた者が半数を超え、周囲や社会に影響を受けず、みんながしっ

かりした考えを持ち行動しなければならない、といった認識を持っている者が多いことを示している。逆に教師をはじめ第3者による介入や関わりではなかなか解決しないのではという認識もあるのではと考えられる。男子においても、「ア」・「イ」の回答を合わせると5割を越え、どうしていけばいいかということを建設的に考えていることがわかる。しかし、「いじめめる人が悪い」といった第三者的な意見や「いじめはなくなる」等の否定的な意見が、少ないながらも2割弱あることも踏まえておく必要がある。

2 学校生活に関する実態

設問6より、いじめ問題とは関係なく学校生活のことで尋ねたが、ここでは、前半と同じくそれぞれの回答をグラフで見えていくと同時に、設問1・2・3の回答より「いじめめる側」・「いじめられる側」・「傍観者」の3グループに群分けをし、そのグループ別に統計を使いながら、設問6以降を見ていくことにする。

グループ分けは、次のとおりである。

(単位 人)

	a	b	c
男子	11	38	24
女子	19	35	33
計	30	73	57

☆a群（いじめられる側）：いじめたことはあまりないが、よくいじめられた群

(設問1の回答「ウ」・「エ」で設問2の回答「ア」・「イ」の者)

☆b群（いじめめる側）：いじめたことはよくあるが、いじめられたことはあまりない群

(設問1の回答「ア」・「イ」で設問2の回答「ウ」・「エ」の者)

☆c群（傍観者）：いじめたこと、及びいじめられたことのどちらもあまりないがよく見てみぬふりをした群

(設問1・2の回答「ウ」・「エ」で設問3の回答「ア」・「イ」の者)

(1) 設問6より

「あなたは、自分の性格や能力などが、学校生活の中で発揮できていると思いますか」と尋ねた(図17)。男女とも4割弱の者が「発揮できている」(回答ア・イ)と答えており、さらに、彼等に「それは、どんな場所または場面ですか」と尋ねたところ(図18)、男女とも7割近くの者が「クラブ活動」と答えている。中学生にとってクラブ活動は、それだけ学校生活の中で重要な部分を占めているということが考えられる。また女子では、「友達関係で」と答えた者が約7割となっており、男子に比べて女子は、友達のことを大変気にしており、かつ、学校生活には欠かせないものであるということがうかがえる。

図17に戻るが、男女とも4割弱の者が、「発揮できている」と回答し、学校生活において自分自身の存在感をしっかりと実感しているのに対し、男子30%・女子20%の生徒が、「発揮できていない(回答エ・オ)」と回答している。これは、自分に自信を持つことができず、なおかつ自分というものの存在感を否定しているということが言える。さらに、「どちらとも言えない」と答えた者が、男子で35%、女子で43%を占めている。これについ

図17 学校生活の中で自分自身を発揮できているか

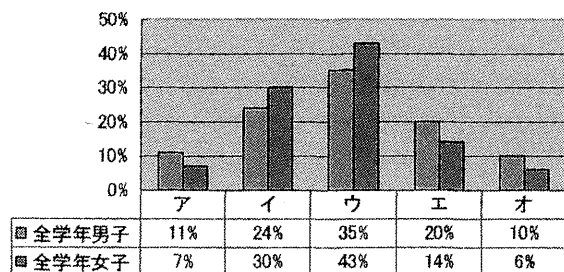
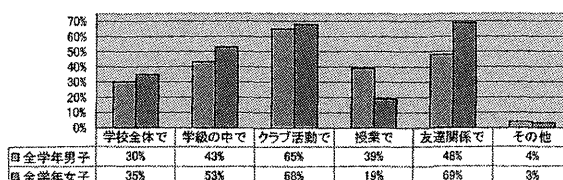


図18 それは、どんな場所・場面か(複数回答)



でも、自分に対して自信が持てないといった表れであろう。これら「ウ・エ・オ」と回答した者に共通することは、自分というものを受け入れ、かつ理解しながら自分自身の存在を認めていく、このような自己認識力または自尊感情といった、大きく言えば「自己確立」のために必要な力に欠けていると考えられる。

次に、前述したabcの3群では、「自分自身の発揮」という点で統計的有意差があるかどうか、平均点を算出して分散分析を行った。結果は、以下のとおりである。

TABLE 1 学校生活における自分自身の発揮度の違い（男子）

a	b	c	差の検定
3.909 (0.793)	3.053 (1.169)	3.167 (0.898)	a > b*

*P < 0.5

TABLE 2 学校生活における自分自身の発揮度の違い（女子）

a	b	c	差の検定
3.105 (0.968)	3.2 (0.979)	2.879 (0.946)	n.s.

男子においては、a群とb群の間で統計的有意差が見られた。つまり、いじめられる側であるa群の方が、いじめ側のb群に比べて、学校生活においては自分自身をよく発揮しているということである。このいじめられる側の生徒は、いじめ問題が解決してからも教師の援助なり保護を日常的に受けることが多く、そういった教師との信頼関係の中で、学校生活の様々な場面において努力をしているということが言えるのではないかな。逆に、いじめ側の生徒は、「いじめ」という間違っただけで自分というものの存在をアピールするなど、学校生活においては自分自身を発揮する場面が少ないと考えられる。

また、女子においては、有意差は見られなかった。

(2) 設問7より

「今、悩みを相談できる友達がいますか」と尋ねた(図19-(1))。まず、「全くいない」と答えた者が、男子では16%（女子4%）であり、2割弱の男子生徒は心からつきあえる友達を持っていないということになる。逆に、「一人以上はいる」と答えた者は、男子70%・女子93%となっており、ここでも、いかに女子が友達を必要としているか、また友達というものの存在が学校生活において、非常に大きなウェイトを占めているということが理解できる。他には、男子の「その他」が、14%と多いが、この中の意見は「悩みがない」や「悩みがあっても相談しない」などであった。全体的に男子はあまり悩みを人に相談しないし、相談できるような友人をあまり持っていないと言える。

次に、abcの3群による比較だが、ここでは度数で見てみた。

結果は、図19-(2)、19-(3)以下のとおりである。

相談できる友達がいるかいないかで見ると、男女ともにabc群にあまり違いはないが、「全くいない」と答えた者が、男子の方に多いことがわかる。

(3) 設問8より

友達・先生・親・兄弟姉妹・先輩後輩の中で、「悩みがある時、相談する順番は？」と尋ねた(図20及び21)。友達を1番及び2番と答えた者が、男子で約8割、女子で約9割となっており、ここでも友達という存在がいかに中学生にとって重要な存在であるかということがわかる。次いで、「親」さらに「兄弟姉妹」という回答が上位を占めている。各家庭によって状況は全く違うであろうが、全体的に見ると、信頼できる順番としては、友達の次はやはり「家族」ということになる。そういった意味で、「先生」という回答が3・4・5番あたりに集中するのは、ある程度予想通りと言っていいだろう。ただ、相談できる順番の一番最後が「先輩・後輩」という結果が読みとれるが、これは、先輩や後輩であっても友達付き合いをしている者は友達として扱い、ここでの先輩・

図19-(1) 悩みを相談できる友達がいるか

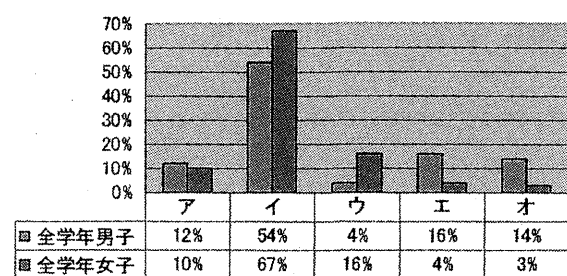


図19-(2) 悩みを相談できる友達がいるか(男子)

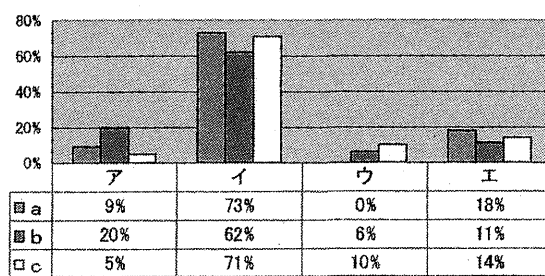


図19-(3) 悩みを相談できる友達がいるか(女子)

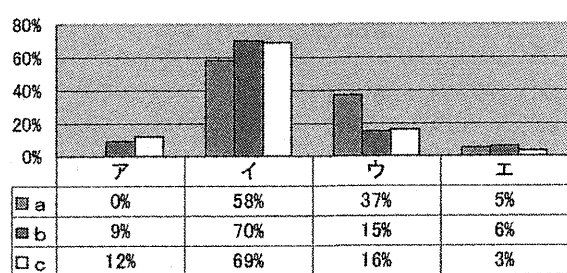


図20 悩みがある時、相談する順番は？(男子)

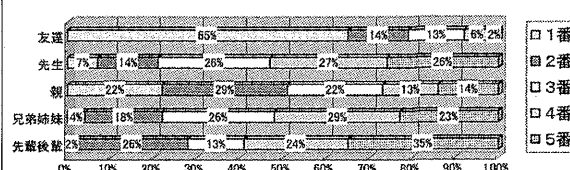
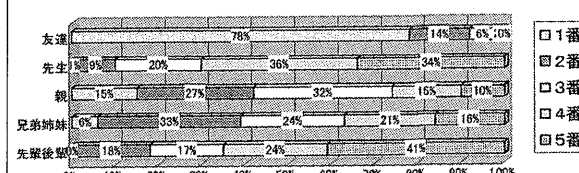


図21 悩みがある時、相談する順番は？(女子)



後輩はクラブ活動等と一緒にいる他学年の生徒として考えたからではないであろうか。

(4) 設問9より

ここでは、「悩み(進路関係以外)を先生に相談したことがあるか?」と尋ねたが(図22-(1)), 前述のabcのグループ別の度数も見ていく。

まず、「数回以上、相談したことがある」と回答した者は、男女とも2割以内であり、教師にはあまり相談をしないという結果であったが、これは、設問8での回答のとおり、悩みがある場合は友達や家族に相談するからであろう。これだけで教師に対する信頼度というものをうかがうことはできないが、生徒達にとっての学校内での教師の存在というものを考える一つの指標とはなるであろう。つまり、いじめをはじめ自分の悩みを相談する存在としては教師はなかなか見れないという現状である。

次に、abc群のグループ別に比較したのが、図22-(2)・(3)である。ここで特徴的なのは、男子ではいじめられる側のa群で、「数回以上相談したことがある」と答えた者が4割弱いることである。bc群が1割強であることを考えると、ずいぶん差がある。また、「全くない」と答えた者が、bc群で7割近くいることも特徴的である。このことから、男子においては、教師の援助等がいじめられる側の生徒にとって、非常に心強いものになっているということではないか。逆に、いじめる側にとっては、教師というのがかなり遠い存在であり、これは生徒の要因、教師側の要因と両方が考えられるが、いじめを解決あるいは防いでいくときの一つの手がかりになりそうである。

女子では、「何度もある」と答えた者が3群とも0%であるが、「数回ある」と答えた者が2割前後いることか

図22-(1) 悩みを先生に相談したことがあるか

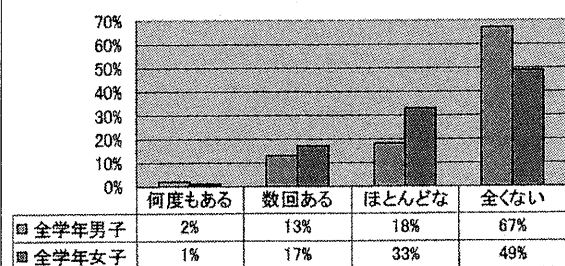


図22-(2) 悩みを先生に相談したことがあるか(男子)

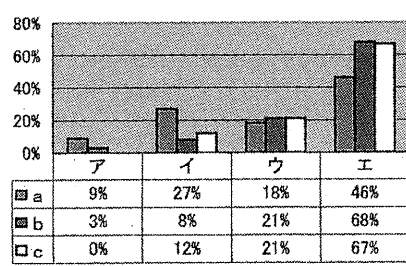


図22-(3) 悩みを先生に相談したことがあるか(女子)

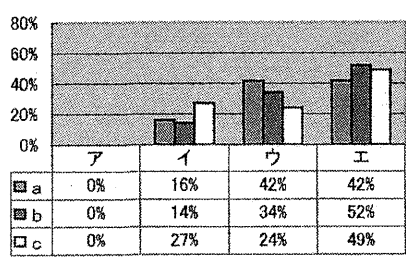
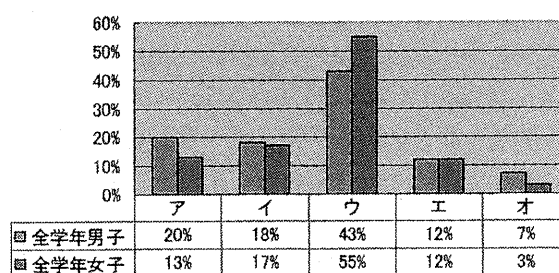


図23 先生から一人の生徒として尊重されているか



ら、相談したことがあるかないかで言えば、男子とあまり変わらない。ただ、cグループの「傍観者群」において多く相談しているのが目につく。つまり、女子では、abc群においてほとんど差はないが、いじめられる側の生徒について男子のそれと比べると、教師の援助をあまり期待していない。したがって日常的に相談もあまりしないということではないだろうか。これは前の設問でも触れたが、女子は自分の意志でという気持ちが強く、教師や周りの者によっていじめが解決するとは思っていないと考えられる。

(5) 設問10より

「先生から、一人の生徒として尊重されているか」と尋ねた(図23)。

ここでは、「学校生活で自分自身を発揮できていますか」と尋ねた設問6と同じく、「どちらとも言えない」という回答が非常に多かった。特に女子では半数を超えており、自分自身を客観的に見ることができないというか、自信が持てない、また先生からどういうふうに見られているか不安である、といった心理的な揺れを表わしていると考えられる。しかし、そういった意味から考えると「尊重されている(回答ア・イ)」と答えた男子約4割、女子3割の者は、自分自身をある程度客観視することができ、しかも教師に対して信頼感を持っているということが言えるであろう。

ただ、男女で2割弱の生徒が「尊重されていない(回答エ・オ)」と答えているが、これは、自分自身に対する自信、また、教師に対する信頼感というものに欠けているということが言えるであろう。このように最近の中学生は、教師や大人に対する信頼感がかなり持ちにくくなっており、そのことは自分自身の自信のなさにもつながっていると思われる。

次に、この設問において、abcの3群で統計的有意差があるかどうか分析した。結果は、以下のとおりであり、男女とも統計的有意差は見られなかった。

TABLE 3 先生から尊重されているかどうかの回答(男子)

	a	b	c	差の検定
平均値	4	3.263	3.458	n.s.
標準偏差	(1.128)	(1.14)	(0.912)	

TABLE 4 先生から尊重されているかどうかの回答(女子)

	a	b	c	差の検定
平均値	3.316	3.257	3	n.s.
標準偏差	(1.216)	(0.84)	(1.101)	

IV 考察

1 生徒の意識調査から

(1) 加害者・被害者への関わり

実態を見てみると、「他人をいじめたことがよくある及び時々ある」と答えた生徒は男子40%・女子32%となっている。このうち、「いじめられたことはあまりない」という生徒は男女とも6割強である。これが、つまり「いじめっ子」といったグループである。男子では全体の25%, 女子では20%となっている。しかし、残り4割弱の生徒は、「よくいじめられる」とも答えており、同じ「いじめっ子」であっても、上記のグループとはまた意味が異なってくるであろう。つまり、以前はいじめられていたが、今はいじめる側にまわっている。また、その逆も考えられる。

このことは、「他人からいじめられたことがあるか」と尋ねた項目でも、同じことが言える。本来ならば、こういった細かなグループ分けを行い、そのグループ毎に、学校生活について分析すべきであったが、今回は人数の都合で「いじめる側」・「いじめられる側」・「傍観者」の3グループによる分析を行った。もういちどそのグループ毎に、違いを見てみることにする。

まず、学校生活における自分自身の発揮度について、男子において「いじめられる側」の生徒の方が、「いじめる側」の生徒に比べて、学校生活では自分自身をよく発揮しているという結果が示された。このことは、「いじめる側」の生徒は、学級活動やクラブ活動、授業等学校内の生活において自分の能力を発揮することができず、気分的な発散を「いじめ行為」というかたちで表現しているのではないか。逆に「いじめられる側」の生徒は、自分が受ける精神的・肉体的苦痛を、教師や家族、あるいは友達への援助のもと、学校生活の様々な活動で発散しているのではないか。さらには、いじめられる側の生徒は、自分なりに能力を発揮でき、自分の居場所を得ているので「いじめる側」にまわることもないのではと思われる。

また、「先生から尊重されているか」ということについては、男女とも統計的有意差は見られなかったが、平均値で見ると、「いじめられる側」の生徒の平均値が男女とも一番高かった。つまり、先生から尊重されていると思っている生徒の割合が高いということである。この回答などを見ても、学校生活における教師への信頼度といったものが、「いじめられる側」の生徒にはうかがえる。

一般的に考えると、いじめ事象が発覚した時、教師は、いじめられた生徒に対しては共感的態度で接しながら事情を聴き、いじめた生徒に対しては、「いじめは絶対許さない」といった強く厳しい姿勢で指導にあたるであろう。こういった指導は、いじめ問題の指導としては普通であり、また、このような姿勢を教師は持っていなければならないものである。ただ、一応の解決をみたあとの事後指導としてはどうか。いじめられた生徒については、細かな配慮を加えながら日常的な観察及び指導・援助をするであろうが、いじめた生徒については、いじめられた生徒に対する細かな配慮による観察や指導・援助といった姿勢に比べ、弱いものとなっている可能性があるのではないか。このことは、いじめ事象が起こるか起こらないかに限らず、そういった傾向にある課題を抱えた生徒に対しても同じである。

このように考えると、学校現場の教師は、加害者・被害者どちらの生徒に対しても、密接な関わりを持ちながら心身のケアを図っていくことが必要であるという基本的な姿勢が問われていると思われる。

(2) 傍観者への関わり

次に、「見てみぬふりをしたことがあるか」という問いに対する回答について考えてみる。

見てみぬふり、つまり「傍観者」という立場にあるこの生徒たちが、いじめられている生徒に与える心理的圧迫というものはいかなるものなのか。現代のいじめは四層構造だと言われている。いじめられる者の周りにいじめる者がいて、その周りにはいじめ行為をはやし立てる者がいる。そして、さらにその周りに傍観者がいるというのである。いじめ行為だと認識していても、傍観者の立場にある者は決して止めたりはしない。自分は何もし

ていないと装うためである。しかし、いじめられている者の目には、そのような者たちはどう映るのであろうか。

今回の調査では、見てみぬふりをしたことが「よくある」・「時々ある」と答えた生徒は、男子 48 %、女子 50 %であった(図 12)。「一度だけ」と答えた生徒も含めると、7 割近くになってくる。そして、「何故そうしたのか」という問いに対しては、男子では「遊び半分だと思った」(49 %)、女子では「後で自分もされるから」(41 %)という回答が最も多かった。前述したように「遊び半分だと思った」と答えた生徒は、おそらくその行為が「いじめ」であると認識しているはずである。だが、遊び半分だと自分に言い聞かせることで、その場から逃避するとともに、自分には関係ないんだと自分を正当化してしまう。これは女子の「後で自分もされるから」という理由と関連してくるわけだが、このような行動がいじめ行為をエスカレートさせ、いじめられる側は中井⁴⁾が指摘するように無力化に陥っていくものと考えられる。

では、そんな彼等に、もっと違った行動を起こさせるにはどうすればいいのか。彼等のほとんどは、「何とかしたいが、何もしないほうがいいのかもしれない」といった心理的葛藤で揺れているはずである。そんな彼等が、自分で勇気を持ち、決断して何らかの行動を起こす。そうなるために、教師は彼等を支えていかなければならないのである。あくまで教師は援助者であり、行動を起こすのは生徒である。日常生活における教師との信頼感、また友達との信頼感を少しずつでも築いていくことこそ、第一歩であると考えたい。その結果として、クラスの中にそのようなことが起こらない土台(雰囲気)をしっかりと作れるかが重要になると思われる。

(3) 男女の性差による違い

いじめの方法やいじめられた後の気持ちなどで、男女によって特徴的な違いがあったので、まとめて整理する。

「何人でいじめたか」(図 4)という質問では、男子の最も多い回答が「自分一人で」というのに対して、女子では「2～3人で」ということだった。また、「どんな方法で」(図 5)と尋ねたところ、男子では「悪口や陰口を言った」・「暴力をふるった」であり、女子では「悪口や陰口を言った」・「無視をした」・「仲間はずれにした」ということであった。いじめ事象の構図から言っても、もちろん、「集団で個人に対して」というものが多いわけだが、男子においては、自分一人であっても相手に対して腹が立ったり、また、自分の利益のためにはいじめ行為を行うといった傾向が見られる。女子については、2～3人を中心としたグループで「悪口・陰口」・「無視」・「仲間はずれ」といったいじめ行為を行っている。やはり、女子特有のグループ化による集団同士の対立・いがみ合い、また、集団から個人を排除していくといった傾向がうかがえる。

「いじめられた後の気持ちは？」(図 11)という質問に対しては、男子は「腹が立って憎らしい」・「仕返しをしたい」というふうに攻撃性を前面に出しているが、女子は「悲しくて泣きたい気分」と、いじめ行為そのものに対する精神的苦痛を強く感じている。「仕返しをしたい」と答えている女子は、わずか数人であり、男子の方が「いじめられっ子」が「いじめっ子」に変わる要素を多く含んでいると考えられる。これは、設問 1 の「他人をいじめたことがあるか」(図 1)という問いで、「よくある・時々ある」と答えた者のうち、「いじめられたこともよくある・時々ある」(図 8)と答えた者が、男子の方が多くことから示唆される。

いじめの防止、及び日常的な早期指導を考えた場合、この男女の性差による特徴的な違いを頭におき、男女それぞれの理解のしかたを考える必要があるということをおさえておきたい。

(4) いじめの心理と抑止力について

設問 1 の(4)で「いじめた後は、どんな気持ちだったか」と尋ねた結果についてだが、「後悔した(悪いと思った)」と回答した生徒が、半数にも達していない。後悔したと答えた生徒は、過去にいじめられた経験を持ち、そのことから深く反省した者もいるであろうし、教師や親の指導が素直に入った者もいるであろう。そういった者が、再びいじめ行為を行う可能性は低いと思われるが、問題は「ざまあみろと思った」「すっきりした」「何とも思わなかった」などと答えた残り半数の者である。生徒の心に共感し、なおかつ本心をつかむことは非常に難しいが、指導する者とされる者の心が通い合わなければ、上記のような気持ちは加害者に残るであろう。いじめ行為を行った直後から後悔し反省する者はごくわずかであり、ほとんどの者が何らかの「止める力」「抑える力」によって自分自身を見直していくと考えられる。その力とは、教師であったり親であったり、また友達であったりするのであろうが、そういった意味で、いじめ行為に対する指導は、事実確認の段階から心と心のぶつかり合いが必要なのである。そしてそれは、日常生活においてお互いがある程度の信頼感を抱いているということが大前提であり、そのためにはやはり、形にはあらわれないところでのひとつひとつの積み重ねが必要なのではないだろうか。

設問1の(5)の回答を見ると、自分で悪いことだと思いいじめを止めた、と答えた生徒は男女とも3割弱となっている。自分のとった行動を深く反省し、このようにはっきりと意思表示できる者は、今後おそらく同じような行動はとらないであろう。その他の回答をした約7割の生徒の今後の課題を考えた時、上述した「止める力」及び「抑える力」の重要性を感じる。つまり、周囲の人々と共感しあい、また認めあいながら他人を思いやる心を育てていく、と同時に、自分自身を大切に、自分という一人の人間を理解しながら自己を確立していく。このように、周囲の人間の愛情に支えられながら自分を成長させていくことができれば、上記の回答ももっと違った結果になるであろうし、いじめ行為そのものが減らずとも増えることはないのではないか。

2 今後の課題について

(1) 現象の把握と連携の必要性

現代社会において、人々は、「いじめ」という言葉に非常に敏感となり、少しでも相手を傷つけるような行為があると、「いじめ」だということで加害者を非難してしまう。それならばということで、そういった行為は人の目に見えないところで行われるようになる。今の「いじめ問題」が陰湿化・継続化してきている原因の一つであることは、まちがいない。また、「遊び」と称し、遊びの延長線として、日常的にいじめ行為を行っているという現実もあるのではないかと。しかし、考えてみると、社会に適応していくための社会性を身につけるためには、ある程度の攻撃性は必要であり、また他人から攻撃や非難をされてもそれに耐えうるための忍耐力も必要である。決して、少々のいじめ行為は仕方ないと言っているのではない。一人ひとりが、「いじめ」という現象について認識を深め、その場での状況判断を誤ることなく、対処していく必要があるということである。一人の人間を責める行為を見て、早急に「いじめ」だと決めつけるのは非常に危険である。個人が状況に応じた対応をするとともに、学校や地域といった集団も、適切な対応を行っていかなければならない。そのためにも、今まで以上の強い連携が、学校・家庭・地域に望まれるのは言うまでもない。

(2) 「生きる力」を身につけるために

今までにも繰り返し述べてきたが、今の子どもたち（生徒）は、急激な社会の変化によって、物質的には非常に豊かな社会で生活をしている。しかし、逆に、この社会が生み出した様々な弊害が、今の子どもたちに大きな壁となって立ちのびだかっているのは確かである（土居³⁾）。家庭の教育力の低下によって、家族あるいは自分自身をも大切に思うことができない。また、周囲の人々とそれほど深い人間関係を築かなくても、生活そのものに支障をきたさない。こういったことから、自他を尊重したり、他者と共生していくことが、非常に苦手になってきている。たとえ、苦手でも、生活していくことはできるのである。

生徒の調査にもあったように、自己確立を目指して自尊感情を育てたり、自己教育力をつけるためには、自分一人の力ではどうしようもないのである。友達、また親や教師などの支えがあって、はじめて身につけていくものなのであり、そのためには、他人を思いやる心や共感する心も大変重要なものとなってくる。学校において、教師は、このような「力」を生徒が身につけるために、最大の援助をしていく使命がある。そうすることが、「いじめ」という行為の防止につながり、また、たとえ過ちを犯しても、立ち直らせる一歩になることはまちがいないのではないだろうか。課題は山積みではあるが、一人でも多くの生徒が、このような「生きる力」を身につけられるよう、学校だけではなく、家族や地域社会が連携して取り組んでいく必要がある。

注：本研究は、大見（現宮津中学校）が平成11年度長期研修報告書として京都教育大学に提出した研究論文の一部に、加筆・修正を加えて作成したものである。

謝辞

適切にご指導及びご助言をいただきました、京都府教育委員会の大越房数指導主事には、心から感謝いたします。また、意識調査に協力いただきました与謝教育局管内の5中学校の校長先生をはじめとする諸先生方、並びに生徒諸君に感謝いたします。最後に長期研修という貴重な機会を与えて下さった与謝教育局並びに野田川町教育委員会の諸先生方に御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

文献

- 1) 井上敏明, 1996, 「いじめ」カウンセリング, 明治図書
- 2) 竹川郁雄, 1993, いじめと不登校の社会学―集団状況と同一化意識, 法律文化社
- 3) 土居健郎・渡部昇一, 1995, いじめと妬み―戦後民主主義の落とし子, PHP 研究所
- 4) 中井久夫, 1996, いじめとは何か (仏教 no37 「特集いじめと癒し」), 法蔵館
- 5) 深谷和子, 1996, 「いじめ世界」の子どもたち―教室の深淵, 金子書房
- 6) 森田洋司・清永賢二, 1994, いじめ―教室の病, 金子書房

資料

<学校生活に関する意識調査>

() 年 男・女

最初に、「いじめ」のことについてたずねます。小学校時代から現在までのことであつたので、自分自身を振り返り、誰とも相談せずに率直に答えて下さい。回答については、記号のあるものは記号に○を、それ以外は () 内にあなたの考えを書いて下さい。

- 1 あなたは、他人をいじめたことがありますか。

ア よくある イ 時々ある ウ 一度だけある エ 全くない

※上記の問いで、「ア」・「イ」・「ウ」と答えた人にたずねます。(何回もある人は、最も最近のことで答えて下さい)

- 1- (1) あなたが、いじめをした一番の理由は何ですか。

ア その人がきらいだから イ その人に悪口や陰口を言われたから

ウ その人に以前いじめられた仕返しのため エ みんながしていたから オ その他 ()

- 1- (2) その時、何人でいじめましたか。

ア 自分一人がいじめた イ 2～3人でいじめた

ウ 4～5人でいじめた エ 大勢でいじめた オ その他 ()

- 1- (3) その時、どんな方法でいじめましたか。(複数回答可)

ア 無視をした イ 悪口や陰口を言った ウ 仲間はずれにした

エ 暴力をふるった オ 物をかくした カ その他 ()

- 1- (4) いじめをした後の気持ちはどうでしたか。

ア ざまあみろと思った イ すっきりした ウ 後悔した(悪いと思った)

エ 何とも思わなかった オ その他 ()

- 1- (5) その時以後、いじめをしていない人にたずねます。

なぜ、いじめをやめられましたか。()

- 2 あなたは、いじめられたことがありますか。

ア よくある イ 時々ある ウ 一度だけある エ 全くない

※上記の問いで、「ア」・「イ」・「ウ」と答えた人にたずねます。(何回もある人は、最も最近のことで答えて下さい)

- 2- (1) その時、どんな方法でいじめられましたか。(複数回答可)

ア 無視をされた イ 悪口や陰口を言われた ウ 仲間はずれにされた エ 暴力をふるわれた

オ 物をかくされた カ その他 ()

- 2- (2) その時、どんな気持ちでしたか。

ア 悲しくて泣きたい気分だった イ 腹が立って相手を憎らしいと思った

ウ 仕返しをしたいと思った エ 何とも思わなかった オ その他

- 2- (3) どんな理由でいじめられたと思いますか。わかれば答えて下さい。

()

- 3 あなたは、いじめを見た時、見てみぬふりをしたことがありますか。

ア よくある イ 時々ある ウ 一度だけある エ 全くない

※上記の問いで、「ア」・「イ」・「ウ」と答えた人にたずねます。(何回もある人は、最も最近のことで答えて下さい)

3-(1) 見てみぬふりをしたのは、なぜですか。

ア 遊び半分でやっていると思った イ 後で自分もされるといやだから

ウ いじめられている人が悪いと思ったから エ ただ何となく オ その他 ()

4 下記の中で、いじめだと思うもの全てに、○をして下さい。

ア クラス内でいばりちらしている生徒を、数人で無視した。

イ 友達間の約束事を破った生徒を、仲間はずれにした。

ウ 物をかくされ腹が立ったので、その友達に一方的に暴力をふるった

エ 数人で遊んでいて、ジャンケンで負けた生徒の服を無理やり脱がせた

オ 人の悪口を平気で言う人がいたので、友達の間で陰口を言った

カ ゲームセンターで遊んでいて、下級生がいたので、強引に言ってゲーム代やジュース代を出させた。

キ 数人で遊んでいる時、真剣にプロレスの技をかけてくる者がいたので、みんなでその生徒に一方的に技をかけまくった。

5 あなたは、いじめを防止したり無くしていくには、どうすればいいと思いますか。

率直に、思うことを書いて下さい。()

次に、学校生活のことでたずねます。今度も、率直にありのまま答えて下さい。

問いの中に出てくる「先生」については、担任の先生だけではなく、学校内の全ての先生という意味で答えて下さい。

6 あなたは、自分の性格や能力などが、学校生活の中で十分発揮できていますか。

ア 発揮できている イ だいたい発揮できている

ウ どちらとも言えない エ あまり発揮できていない オ 発揮できていない

6-(1) 上記の問いで「ア」・「イ」と答えた人にたずねます。

それは、どんな場所または場面ですか(複数回答可)。

ア 学校全体の中で(行事・取組を含む) イ 学級の中で(行事・取組を含む)

ウ クラブ活動で エ 授業で オ 友達との関係の中で カ その他 ()

7 あなたは、今、悩みを相談できる人がいますか。

ア たくさんいる イ 数人いる ウ 一人だけいる エ 全くいない オ その他 ()

8 あなたは、悩みがある時誰に相談しますか。相談できる順に番号をつけて下さい。

友達 () 先生 () 親 () 兄弟姉妹 () 先輩及び後輩 ()

9 あなたは、悩み(進路関係を除く)を先生に相談したことがありますか。

ア 何度もある イ 数回ある ウ ほとんどない エ 全くない

9-(1) 上記の問いで、「ウ」・「エ」と答えた人は、なぜ相談できないのですか。

()

10 あなたは、先生から一人の生徒(人間)として尊重されている(大切にされている)と思いますか。

ア ほとんどの先生から尊重されていると思う

イ 一部の先生からは尊重されていると思う

ウ どちらとも言えない

エ ほとんど尊重されていないと思う

オ 全く尊重されていないと思う

ご協力ありがとうございました